



施設園芸技術指導士としての抱負

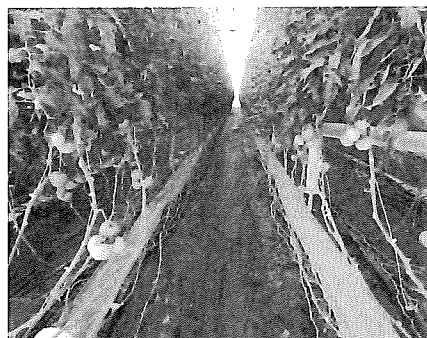
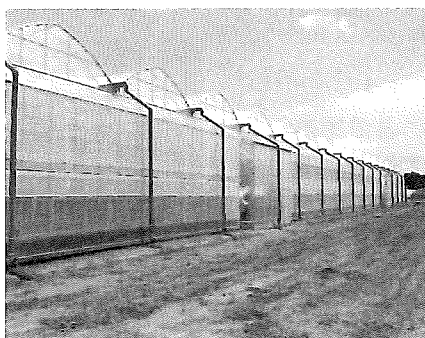
山中 弘則 JA全農 九州営農資材事業所資材課

私は2003年にJA全農に入会して以来、被覆資材をはじめとした農業資材の購買や園芸施設の導入支援に関する業務に携わってきました。農業生産には、栽培する作物、地域、時期によって多岐に渡る資材が使われます。資材に求められるニーズも日々変化してい

ます。今後は、「植物工場」や「次世代施設園芸」といったキーワードに象徴されるように、施設園芸の高機能化、大規模化がますます進展すると思われます。そのため、我々施設園芸に関わる関係者は、新技術や新資材に関する情報収集や知識の向上に努める必要があると感じています。

私は2014年に施設園芸技術指導士の資格を取得しましたが、園芸施設や資材等のハードの知識だけでなく、ハウス内の作物がどういう状態にあるのかを判断できる技術と経験がもっと必要だと痛感しています。作物が今どういう状態にあるか分からなければ、ハウス内環境をどのような状態にすればいいのか？ どのような機器や資材をどう使えば理想のハウス内環境に近づけられるのか？ その答えは出せないからです。

さて、全農では、現在「農家手取りの最大化」を基本方針とし、生産から出荷（販売）までの「トータルコストの低減」と「多様な生産者ニーズへの対応」を重点課題として取り組んでいます。施設園芸に関する取り組みの一例を紹介します。



「ゆめファーム全農」のハウス外観とトマト栽培の様子

JA全農式トロ箱養液栽培システム「ういずOne」は、発泡スチロール製の隔離床とシンプルな液肥混入器を組み合わせた、低コストな養液栽培システムです。水稻育苗ハウスの有効活用をコンセプトとしており、東北地区を中心に、水稻育苗後、ういずOneでトマト栽培を行うなどの導入事例が増えています。

また、平成26年8月に栃木県で高機能園芸施設「ゆめファーム全農」を設立し、トマトの実証栽培を開始しました。環境制御システムの導入や先進的農家の栽培ノウハウを活かし、土耕で反収40tを目指すトマト多収栽培の実証試験を行っています。収穫されたトマトは全量、地元JAへの共販出荷を行っています。今後、ここで得られた各種機器や資材の情報や、栽培管理・労務管理に関するノウハウを総合的に提案できるように取り組んでいます。

私は、JAグループに関わる様々な関係者と協力しながら、上記のような取り組みを通し、生産者が夢を持って営農できる元気な産地づくりに、微力ながら貢献していきたいと考えています。